
孤高なる者達

春野キリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

孤高なる者達

【Nコード】

N4250S

【作者名】

春野キリ

【あらすじ】

フィルゼパス。

そこは、複数の世界で成り立っている大世界。小世界は“アンバー”という守り人がおり、一つ一つの世界に“アンバーカード”が存在している。

だがそこに、ゼルクという敵が現れて侵略してしまった！

そして、ゼルクの王がとあるゲームを始めた事により、違う世界に異変が起こり出す！

アンバーカードを集め、ゼルク王を倒した者・マスターはゼルク

の時期王になるというゲーム――

そのゲームに選ばれた者達が、フィールゼパス内を駆け巡る！！

＊サイドごと（火炎、地木、水氷、風雷）に分かれており、主に火炎サイドがメイン。

プロローグ

複数の世界が集まる世界、フィルゼパス。

一つ一つの世界を守りし者をアンバーと呼び、一つの世界を成り立たせるアンバーカードというのがある。

フィルゼパスには、ある言い伝えがある。

アンバーカードの枚数により、大いなる力を与えられ
全てのカードを集めし者を、フィルゼパスの王とせん、と――

「さあ、集まれ。我が選んだ、異界の者達よ――！」

謎の敵・ゼルクに支配されたフィルゼパス。

そこに今、異なる世界の住民達が集まりだす。

プロローグ（後書き）

次からが、一話です！

一話 始まりの森／爽やかな青年はご用心（前書き）

いろんな作品が一つの世界に集まる！

まずは、メインキャラとなる五人の話から！

それでは、火炎サイドからスタート！

一話 始まりの森／爽やかな青年はご用心

…す……

……で……

私は……ない……

——声が聞こえた。

自分に似た声と、女性のが。

何かを話しているようだった……

〃〃〃

青年はゆっくりと目を開けた。

なぜか地面に倒れていたので、立ち上がった。

「なんだ、ここは……」

周りを見渡して、青年は啞然としてしまう。

見えたのは、緑が広がってく風景。巨大な樹木。顔を上げると、葉に反射された光が当たった。

手を目の前に軽く覆わせ、青年は眉間を寄せた。

そして、目が覚める前の事を思い出す。

自分は確か、友達の家にしたれたコートを取りに行こうと街の中にいた。

そしたら突然、眩い光が空から降り注ぎ、目を閉じた。

「目を開けたら、森の中って……」

トリップかよっと、青年はため息まじりに呟いた。

「(さて、どうするか)」

青年がいる場所から離れた所で、青年を観察している四つの人影があった。

そのうち、一人は木に背を預けていた。

「おー。起きた、起きた」

「起きるだろっ」

「起こせば良かっただろ？」

実はこの四人、青年の傍で一緒に倒れていたのだ。

だが、なぜか彼らは青年から離れた場所に移動していた。

「あいつを起こすと思ったが、何か感じるんだ」

「へー。あんた、戦いなれてるの？」

「……」

黒い薄生地に身を包んだ男は、特徴のある赤髪をした男をギッと睨み付けた。

その様子に一番背の高い男はため息をつき、バーテン服を着た男は顔を傾けて青年のいる方を見た。

「あいつ……いねえぞ？」

「「「!?」」」

三人も確かめたが、自分達が倒れていた場所に青年の姿が消えてしまっていた。

ほんの一瞬、目を離しただけだというのに。

「いつの間に!？」

「ほんと、ほんと」

「足、はえーなあ」

「まあな」

「すげえ」

「サンキュー」

……黒服の男は四人以外の声が聞こえてくる事に気付き、辺りを

見渡しだす。

「後ろだ」

背中からはっきりとした声が響き、4人の男は振り返った。

「やあ♪」

振り向いた先に、爽やかな顔で片手を振る青年姿があった。

突然の事に、四人は身体を引いてしまう。

「なんだよ。いいだろ、あんた達も俺の後ろを取ったんだからっ」
両目を前髪で隠れている青年は不服そうな顔をし、腕を組み合
せた。

ふと、黒服の男は思った。

なぜ自分達が青年の後ろにいたのか――と。

青年はニヤリと口元だけで笑うと、黒服の男が考えていた事を聞
いたように告げてきた。

「俺は起きた瞬間に状況を把握してるんだ」

「!?!」

「まあ、あんた達も分かってるようだけど。ここは、俺達の住んで
いる世界とはまったく違う世界だ」

人差し指を立て、青年は語りだした。

「あんた達も光を浴びたようだけど、多分それが原因だろうな。た
だ、それがなぜ別々の世界に注がれたのか、誰がやったのかはわか
らないが……」

「君は、一体」

「俺？」

「俺は翼乃、神翼乃だ」
じんよくの

一話 始まりの森／爽やかな青年はご用心（後書き）

一話でした。

てか、名前が一人しか出てない！

メインである火炎サイドメンバーは、下の五人。

<マスター>

神翼乃

<プレイヤー>

竜堂始

黒鋼

沙悟浄

平和島静雄

五人とも別々の世界。

ただし、始と静雄は同じ世界だが会った事がないので、初対面。

次は、四人の名前（翼乃がいいそうだがっ）と初バトル（？）だ
とっ。

二話 始まりの森／人は誰だって不振に思う（前書き）

放置しすぎましたっ。すみません。

二話 始まりの森／人は誰だって不振に思う

神翼乃と名乗った青年は、目にかかっている前髪を掻き揚げる
現れた目は、燃えさかる火炎のような紅い色をしていた。

「なあ……俺は名前言ったからさ、あんたらも教えてくれよ？」

年下であるはずだが、態度は高い。

彼らはそんな青年に未だに警戒心を抱いており、名乗る気分では
なかった。

少なくとも、一人を除いてだが。

「あー。俺は平和島静雄へいわじましずおっていうんだ」

バーテン服の男は、疑問を持たずに告げてきた。

そして、四人は思った。こいつはバカなのかつと。

「あ。どうした？」

と静雄が訊ねてきたので、四人は「別にっ」と答える。

「俺は、竜堂始りゅうどうはじめだ」

静雄に続けるように、一番背の高い男が言った。

「俺は沙悟浄さしじょうな」

と、赤髪の男。

「……黒鋼くろがね、だ」

と、黒服の男も名前を告げた。

「そうか……」

翼乃はさらりと髪を上げていた手を離し、空いていた腕と組み合
わせた。

「とりあえず、先に進まないか。突っ立てても時間が経つだけだし」
「そうだな」

と、翼乃の提案にすぐに答えたのは静雄だけで、他の三人は顔を

逸らしていた。

〃〃〃

高々しい木々の中を歩き出す五人。

翼乃を先頭に、すぐ傍に静雄、少し後ろの方に始・黒鋼・悟浄。
「（警戒されてるな）」

距離をとっている三人を振り向かず、翼乃は小さくため息をついた。

分かってはいる。

自分達はそれぞれ違う世界から来た。

現在信じられるとすれば、自分だけだろう。

けど、それじゃ駄目だと、俺は……

「どうした」

「え、いや……」

傍にいた静雄に声をかけられ、翼乃は呆気に捕らわれたがすぐに返した。

「そうか」

「えっと、さ。あんたは疑わないわけ？」

「あ？」

「俺、ていうか、あんた以外の奴等をさ。普通別世界同士だから、警戒するだろ？」

翼乃が言うと、静雄は首を傾げ、

「なんで疑うんだ」

と、言ってきたのだ。

「はい？」

「別に俺は別世界とかどうか、難しい事はわかんねえよ。それに、俺の周辺には変な奴等ばかりだしよ」

「……まあ。俺も周りが人間じゃないのもいるが」

「だろ？」

いや、あんた違う世界の人だろうと、翼乃は口にしようと思ったがやめた。

言っても無理かもしれないな、この男には――

「あんた、バカとか言われてない？」

「ああ、言われてるな」

そんなすぐに答えるからだろうなと、翼乃は顔を引き付けていた。

翼乃と静雄と距離を離して歩いている始は、二人の背中をじっと見つめていた。

「えーと。確か、始だっけか？」

と、隣にいる悟浄に声をかけられ、始は目線だけを向けた。

「そうだが？」

「あんま警戒すんなって。“旅は道ずれ世は情け”っていうじゃん」

「……その口ぶりじゃあ、旅慣れているようだな」

後ろで黙っていた黒鋼が、口を開いて訊ねてきた。

「まっ、旅してる最中だったからな。そういうあんたも、旅してるだろ？」

と言い返され、黒鋼は顔を逸らした。

悟浄は笑みを浮かべると、始の方に向き直った。

「始は……旅してた？」

「逃避行なら、な。人類の敵と言われていたからな」
苦笑を見せる始に、ふーんと悟浄は頭の後ろに腕を回して組み合
わせた。

と、その時。

前を歩いていた翼乃と静雄の足が止まり、三人もその場に留まっ
た。

そして、翼乃が静雄の服を掴んで、後ろに投げ出してきた。

二話 始まりの森／人は誰だって不振に思う（後書き）

やっとのことで、二話でした！

やっと、全員の名前を出せたっ。

まあ、序盤なので警戒してます（特に翼乃に対してっ）
静雄は誰に対しても、疑問を持っていません。

バカだからね、シズちゃんはっ。

次でやっと、やっとバトルにっ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4250s/>

孤高なる者達

2011年5月26日23時25分発行